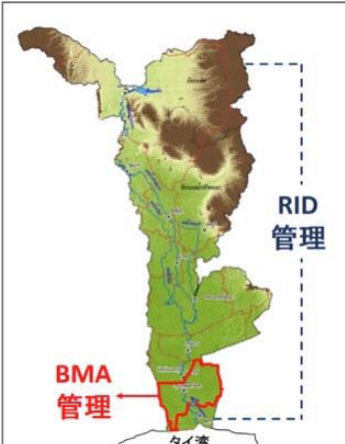


掲載号・キーワード・執筆者	内容
<p>その 17 (ニューズレター No.80 2015.3.19)</p> <p>リスク 2 治水に関するリスク</p> <p>執筆：古賀憲一 (佐賀大学名誉教授)</p>	<p>リスクの定義は、分野によって様々です。端的には、$\text{リスク} = (\text{発生確率} \times \text{発生による被害})$ のように考えるとわかりやすいでしょう。1年か2年に1回、頻繁に氾濫するような川の近くに家を建てること（住むこと）は困難ですので、宅地以外で氾濫を前提とした土地利用を考えるとと思います。この場合、家や生命に対する被害はゼロです。農地であれば、氾濫時に農作物の損害は発生することになります。このような場合、安全度は低いですが生命や家の損失は発生しないので、このときのリスクはゼロに近い、もしくは経済的なリスクは低いともいえます。一方、氾濫対策を講じた結果、河川の氾濫度合い（発生確率）が低くなれば、安全度が高くなり、地域によっては長い間に都市開発が進むことに繋がり、場合によってはかえってリスクが高くなることもあり得ます。リスクは、よくないこと（災害）が発生した後のことが対象となります。安全度は、発生しないようにすることを前提とする考え方ともいえるでしょう。安全と安心とは異なるものとして表現される所以かもしれません</p>
<p>その 18 (ニューズレター No.81 2014.6.23)</p> <p>タイの低平地：バンコクの水管理</p> <p>Narumol, V. (佐賀大学・准教授)</p> 	<p>低平地であるバンコクは、国内最大河川のチャオプラヤ川の河口部に位置しています。タイの人口は6,952万人。その約6分の1の人口がタイ経済の中心地バンコクに集中しています。バンコクでは、大雨時には上流からの影響、さらには潮位による下流からの影響を受け、バンコク市内からチャオプラヤ川への排水が困難になり、浸水被害を受けます。一方、乾期には上流における灌漑用水利用の影響によって流量が少なくなり、水不足、水質汚染、さらには海水遡上問題が発生しやすくなります。近年の降雨が短期間に集中し乾期が長くなる傾向によって、バンコクを含むチャオプラヤ川の下流部では乾期の渇水と雨期の洪水がほぼ毎年繰り返されています。2013年と14年の乾期には、河口から97km上流にあるバンコク水道局の取水口周辺で基準値を超える塩分が観測されました。上記の問題を解決するには総合水資源管理が必要ですが、現状ではバンコク以外のチャオプラヤ川流域の水資源管理は灌漑用水中心に Royal Irrigation Department (RID) が担当し、バンコク区間のみは Bangkok Metropolitan Administration (BMA) が管理するという、日本では見られない縦割り行政が存在しています。2011年の洪水をきっかけに全国の総合水資源管理システムを開発することが決定され、バンコクにおける水問題の改善が期待されます。</p>

※執筆者の所属等はその当時のものです。